

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 令和元年度大学院特定課題研究研究成果報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保田, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001681">https://doi.org/10.57529/00001681</a>

## 令和元年度 大学院特定課題研究 研究成果報告書

**研究課題：**地域再生と持続可能な社会システム形成に関する学際的研究(2)

**研究代表者：**久保田 裕子

**共同研究者：**久保田裕子、古沢広祐、中馬祥子、茂木 栄、黒崎浩行、松本久史、藤本頼生

### 研究成果

本研究は、今日の少子高齢化、過疎過密、地域の衰退など、日本社会が直面する課題に対し、マクロ的な視点からはグローバル資本主義経済の問題究明などの社会経済システムについて、ミクロ的な視点からは地域再生や持続可能な農業と都市との連帯に係る市民等の運動の動向に焦点を合わせた地域再生に関して、個別分野・領域をこえた学際的な総合研究を行うことを目的として実施した。

研究の方法としては、社会経済システムと地域再生について、①地域経済・環境社会分野、②地域社会・伝統文化分野のそれぞれに関して、(ア) 地域再生に関する調査研究活動、(イ) 理論研究に関する研究会・セミナーの企画・運営・情報共有、(ウ) 内外の学会、研究会・セミナーへの参加の3つの観点からの調査研究を行った。

研究の成果は、次の通りである。なお、成果のとりまとめに当たっては、当該研究費用以外の費用による研究成果も含まれていることを付記する。

#### (1) 地域経済・環境社会分野

地球規模で対処するために国連が掲げた「持続可能な開発目標 (SDGs)」(2015) や、そこでの「持続可能な農業」として注目されるアグロエコロジーや有機農業、加えて2017年に国連が採択した「家族農業の10年2019—2028」、2018年12月に採択した「小農民と農村で働く人々の権利に関する宣言」(小農の権利宣言) などの動向を踏まえた社会経済システムと地域再生に関する

研究成果は、次の通りである。

#### (ア) 社会経済システムと地域再生に関する調査研究

・古沢広祐

##### <学会報告>

①2019年9月13日、共生社会システム学会2019大会、福知山公立大学。企画セッション1〈農の再生〉による地域再生、個人報告「SDGs時代の日本の地域・農業・農村」

―地域社会の維持・発展に向かう諸潮流を展望し、とくに国連SDGsとの連携の重要性について報告。

②2019年10月10日、地域活性化・国際会議（ERPS2019）：RURALITIES IN ACTION

主催：ERPS：Espace rural et projet spatia Rural Space & Spatial Design network（地域計画・デザイン研究ネットワーク）開催地：フランス、モンペリマル。個人報告「Re-evaluation of Livelihood Based on Agricultural Activities（地域農業がもつ生活価値の再評価）」

―地域の多様な主体による持続的発展の実践がメインテーマの国際会議にて、日本での地域農業、有機農業運動などの展開事例を報告。

③2019年11月3日、日本平和学会2019秋季研究集会、新潟県立大学、企画セッション・部会3（惑星限界の平和学——非ヒトとの共生のために）、個人報告「共生・共存パラダイムとグローバル資本制社会」

―地球環境の限界の課題と処方箋に関して、経済学・政治学・社会学・農学等から多面的に検討した。

④2019年11月16日、国際開発学会・人間の安全保障学会2019共催大会、東京大学駒場キャンパス。企画セッション「グローバル開発協力を考える―開発援助を見直す―」、個人報告「持続可能な開発目標（SDGs）と世界を変える新たな枠組み」

―グローバル開発協力の視点からSDGsの動向の経緯、課題について報告。

### <書籍>

共著『SDGs時代のグローバル開発協力論 開発援助・パートナーシップの再考』重田 康博・真崎 克彦・阪本 公美子（編著）、第2章「SDGsと世界を変える新たな枠組み」（p52-69）を執筆、明石書店、2019年10月15日。

単著『食・農・環境とSDGs 持続可能な社会のトータルビジョン』全245頁、農山漁村文化協会、2020年2月28日。

### <雑誌記事>

①「国際社会の中での日本とSDGs——持続可能な世界へ、求められる変革」『農業と経済』2019年9月号（vol.85 No.8）昭和堂

②「総合人間学・構築のために（試論・その2）——ホモ・サピエンスとホモ・デウス、人新世（アントロポセン）の人間存在とは？」

『総合人間学研究』第13号（オンラインジャーナル）、2019年5月31日、総合人間学会

・久保田裕子

### <講演・報告発表>

①「世界が認めた『小さい農業』—国連『家族農業の10年』と有機農業運動」埼玉県主催「有機農業交流会」2019年8月29日、於 北本市文化センター

—有機農業の政策、有機農業の実践における小規模・家族農業の重要性

②「貿易自由化と食と農と環境—遺伝子組み換え・ゲノム編集と有機農業運動—」埼玉県農業大学校・有機農業専攻コース特別講義、2019年11月21日、於 熊谷市同農学校

—経済連携協定・自由貿易協定の実効により国際環境が変化する中での食品安全問題の動向を踏まえた有機農業運動の重要性

③「参加型認証システム（PGS）とは—IFOAM・PGSのねらい、日本の事例紹介、PGS活動と産消提携—」、農林水産省北陸農政局主催「北陸地域環境保全型農業・有機農業推進セミナー」、2019年12月9日、於 石川県教育会館（金沢市）

—国際・全国規模の有機認証制度を補完し、地域内で成り立つ有機農業の

参加型保証のしくみとその可能性について解説

④ 「『有機』表示と有機農業の参加型確認（PGS）の現状と課題」、第20回日本有機農業学会全国大会・個別報告、2019年12月22日、於 立教大学

—「有機」表示が有機 JAS 検査認証制度のみに限定されていることに対し、有機農業推進政策として地域で参加型確認のしくみを援用することの重要性、及び、国内で先駆的に実践を始めた「オーガニック雫石」の PGS 調査活動の視察報告

#### <雑誌記事>

① 「食と農を地域に取り戻す CSA・『提携』の国際的な連帯を求めて」

『土と健康』No.489、2019年4・5月合併号、日本有機農業研究会、pp.18-20

—ギリシャ・テサロニキ市で開催された第7回 URGENCI = 提携 CSA 国際ネットワークへの参加報告、及び、「ヨーロッパ CSA 宣言」「アメリカ・カナダ CSA 憲章」などの紹介

② 「家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン設立」『土と健康』No.491、2019年7月号、日本有機農業研究会、pp.16-17

—国連「家族農業の10年」の取組みと連携する日本の連携組織の設立についての解説

③ 「有機農業を広げよう 警告あり！農薬の健康への影響」『土と健康』No.496、2020年3月号、日本有機農業研究会、pp.2-7

—農薬訴訟（アメリカ）で原告の勝訴が相次いだことを契機に、農薬の健康への影響への関心が高まった。2019年9月の「日本有機農業研究会夏のシンポジウム2019」、及び10月、12月に来日したラット実験をしたセラリーニ教授、「マムズ・アクロス・アメリカ」（反農薬・オーガニック活動）のリーダー、ゼン・ハニーカット氏講演概要の紹介。

(イ) 理論研究に関する研究会・セミナーの企画・運営

・古沢広祐・中馬祥子

「資本主義再考 (RC) 研究会」(2019年度、國學院大學) の開催

・第24回研究会 5月11日

第1報告 坂本誠 (ローカル・グランド・デザイン) 「中山間地域における地域社会の空洞化と地域運営組織の役割」

第2報告 近藤和美氏 (中央大学) 「消費者による農と食のオルタナティブ運動の考察: 社会運動とその周辺理論」

・第25回研究会 7月29日

第1報告 古金義洋 (JA 共済総合研究所) 「賃金低迷、格差拡大と逆流するグローバル化の流れ」

第2報告 大友和佳子 (JA 共済総合研究所) 「東日本大震災後の若年層・移住者の活躍の要因と効果について

一宮城県気仙沼市唐桑地域の事例から一」

・第26回研究会12月23日

第1報告 白川真澄 (ピープルズプラン研究所) 「MMT は日本に当てはまるか」

第2報告 北見秀司 (津田塾大学) 「ポスト資本主義的民主主義における市場について」

・第27回研究会2月27日

第1報告 平川均 (国士舘大学) 「一帯一路の政治経済学—アジア経済における BRI の意義と可能性—」

第2報告 古沢広祐 (國學院大學) 「食・農・環境と SDGs—持続可能な社会のトータルビジョン—」

・久保田裕子

「小農・家族農業研究会」の開催

地域における小規模・家族農業は自給的な生活をしており、その一部は有機農業を営み、有機朝市・直売所 (日本型ファーマーズマーケット) への提

起的な出荷や、じかに消費者と提携する消費者参加型農業「産消提携」・CSA（地域支援型農業）に参加している。そこで、国連が「家族農業の10年 2019—2028」（2017年12月）、「小農民と農村で働く人々の権利宣言（小農の権利宣言）」（2018年12月）を採択したことから、こうした小規模・家族農業と提携型有機農業の親和性に着目し、産消提携・有機農業の視角から国連の問題提起である小規模・家族農業、いわゆる小農について、一連の研究会を実施した。

第一部で講師1人に問題提起の報告発表をしてもらい、第二部でディスカッションという形式をとった。渋谷・環境と文化の会（國學院大學学術登録団体）、日本有機農業研究会の共催により実施。毎回20～30人の参加者。会場はいずれも國學院大學5号館教室。司会進行・久保田裕子

第1回 『『家族農業経営の変容と展望』をめぐって』酒井富夫（富山大学教授、農業経営学） 2019年3月8日

第2回 『『小国寡民と共同体』をふたたび考える』大崎正治（國學院大學名誉教授、経済人類学） 4月26日

第3回 「安倍農政と家族農業の課題」北出俊昭（農業協同組合新聞論説委員、元明治大学農学部教授） 2019年6月29日

第4回 「家族農業・有機農業・小農制」中島紀一（茨城大学名誉教授） 2019年9月14日

第5回 「いま、農村女性は —「農協婦人部」の歴史から、これからを考える—」西沢江美子（農業ジャーナリスト） 2019年11月30日

第6回 「小農・有機農業が生き残る道—生産者と消費者をつなぐ実践体験から—」大木 昌（明治学院大学名誉教授、人類学） 2020年1月11日

第7回 「食料・農業・農村基本計画への提言と中間とりまとめ」久保田裕子（國學院大學経済学部教授、消費経済学）

2020年3月6日（コロナ問題により資料配付）

## (2) 地域社会・伝統文化分野

自然・人間関係を深く問い直し、伝統的文化の再評価、自然資源を有効活用していく知恵と協同性に基づいた農林水産を重視する、環境・国土・生活・文化が保全されていく持続可能な社会システムを展望する観点に立ち、2011年3月11日に起きた東日本大震災及び東電福島第一原発事故による災害への復興に関する東北地方、北関東などについて調べた先行研究を踏まえ、大震災の復興における伝統文化が果たす役割や地域自立の意義やその実践などの課題についての研究成果は次の通りである。

### (ア) 社会システムと地域再生に関する調査研究

#### ・古沢広祐

2019年11月24日、地球システム・倫理学会第15回学術大会、東京大学伊藤国際学術研究センター。個人報告「被災地復興と伝統文化に関する一考察—三陸地域にみる文化的レジリエンスの人類史的意味について—」

—科研プロジェクト「災害・復興と伝統文化の役割に関する学際的研究」の成果の報告。

#### ・黒崎浩行

#### <発表>

平成30年度に行った宮城県気仙沼市小泉地区での神社祭礼の調査をもとに、日本宗教学会第78回学術大会（2019年9月15日）にて「災害後の集落の変化と祭礼文化の包摂性」と題する発表を行った。

#### <書籍>

本研究に関連する成果として『神社神道の社会的役割—地域再生・メディア・災害復興』（弘文堂、2019年12月）を國學院大學出版助成（甲）の助成を受けて刊行した。現代社会で神道・神社、とりわけ、祭りや伝統芸能など神道文化が果たしうる役割について、地域再生、メディア・コミュニケーション、災害復興の面から、実践のあり方やその担い手の認識に焦点を当てた論考をとりまとめた。



・茂木 栄

<報告書>

『いのちの森をたどる一東日本大震災復興支援活動の記録―』（研究論文、報告、シンポジウム資料等）共著 社叢学会 1-329頁 2019年7月7日刊（これは2011年3月の東日本大震災の鎮守の森とコミュニティの復興支援とその記録を昨年度まとめたもの）

茂木の執筆部分

第2部 岩手県編

3 火災を退けた奇跡の社、祭のシステムが被災者を助けた 小槌神社（大槌町）

5 津波でんでんこ・奇跡と悲劇、供養絵馬 鶯住神社（釜石市）

第3部 シンポジウム記録

1 被災地の社叢調査を活用した震災復興を願う 社叢復興に向けて（2014年6月22日開催）

2 災害と社叢文化（2013年3月2日開催）

3 社叢が紡ぐ地域の絆～いのちと心を守る鎮守の森～（2011年11月16日開催）

(イ) 上映会・講演会の開催

・茂木 栄

<上映会の開催>

2019年10月26日（土）、13：30～17：00國學院大學に於いて、宮城県南三陸町の大震災までの波伝谷集落の生活を記録した映画『波伝谷に生きる人びと』を上映。監督の我妻和樹氏に「震災を経ても土地に生きる一南三陸町波伝谷、12年間の映像記録を通じて―」と題して講演をいただいた。大学の民俗調査で関わった波伝谷集落に卒業後も通い続け、3年間に亘って記録したもので、毎年3月に行われる獅子舞の行事（春祈祷）を中心に、過渡期にあるコミュニティと人びとを丁寧に映し出した作品である。撮りためた映

像を波伝谷で披露しようとした前日、大津波に襲われた。震災を経たのちも土地に生き、地域とともに生きるということは一体どういうことなのかを映像で問い続けている。

参加者 学生85名、一般市民64名、計149名の参加があった。司会 茂木栄  
**<講演会の開催>**

① 2019年4月20日(土) 14:00~16:30 (於 國學院大學)

「日本の自然林 一分布と動態」と題して、原正利氏(社叢学会理事、元千葉県立中央博物館部長)の講演を行った。

学生・市民参加者数110名、司会 茂木栄

② 2019年7月27日(土) 14:00~16:30 (於 國學院大學)

「鬼と仏—日本人の信仰の姿」と題して、J.A. キブツ氏(元フランス国立科学研究センター教授)と川寄瑞穂(神戸大学、日本学術振興会特別研究員PD)のお二人の講演と映画『鬼来迎』(ポーラ伝統文化振興財団制作)の上映を行った。

学生・市民参加者数124名、司会 茂木栄

③ 2020年1月25日(土) 14:00~16:30 (於 國學院大學)

「玉川上水生き物調べ—タヌキと花マップ—」と題して高槻成紀(麻布大学いのちの博物館上席学芸員・元東京大学教授)の講演を企画。玉川上水のささやかな自然の中に様々な動植物の生態系が存在していることを明らかにしてくれた講演であった。

学生・市民参加者数105名、司会 茂木栄

#### (ウ) 内外の学会、研究会・セミナー等への参加

「一楽照雄(日本有機農業研究会の創立者)の思想を語る会」(久保田裕子)、「全国有機農業の集い 2020 in 水俣」(古沢広祐)などに参加。

#### 備考

研究費当初予算額： 86万円 (実績 789,889円)